

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2019年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	日本文学	専攻		
研究代表者 (2020年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名				
	博士後期課程3年 学生番号 17PG003J		泉 溪春 印				
指導教員	所属部局・職		氏名				
	文学部・教授		石川 巧 印				
自然・人文・社会の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
研究課題	1950年代における〈戦争〉表象——「第三の新人」を視座として						
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2020年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名				
	文学研究科・日本文学専攻 博士課程後期課程3年		泉 溪春				
研究期間	2019		年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 197,027円		／ (採択金額) 200,000円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は「第三の新人」の〈戦争〉表象を探るために、遠藤周作『青い小さな葡萄』、安岡章太郎『遁走』、小島信夫の〈戦争〉小説を扱うものである。遠藤の作品において〈戦争〉は、政治闘争として描かれており、個の抹殺・忘却という事態に迫るものとしてある。安岡の作品においては、「自己形成」を果たし得ずに〈戦争〉に巻き込まれてしまうことを主題とし、「戦中派」による〈戦争〉への対峙の可能性を探るものとしてある。小島の作品においては、〈戦争〉は「日本人」への同一化の問題として設定されており、日系二世を主人公とすることにより展開していた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 1950年代 } { 第三の新人 } { 戦争 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、「第三の新人」たちの〈戦争〉表象を探るものである。「第三の新人」たちの作品内容の分析に加え、その傾向を取り上げたものに、服部達による一連の評論がある。そこで挙げられる「非政治性」という特徴は、「第三の新人」たちの作品理解の補助線として機能してきた。「政治」から距離を取り、「日常」や「家庭」を描いた作家グループとして「第三の新人」は評価されているが、戦後一〇年という時期を前後して、戦時下や軍隊組織における生活、戦争がもたらした被害の痕跡などを描いていたことはこれまであまり注目されてこなかった。「第三の新人」における〈戦争〉表象を探ることは、戦後一〇年における〈戦争〉の諸相を明らかにするとともに、「戦中派」という世代の問題にも接続することができる。これは特に「第三の新人」の研究が、作家の特質の称揚で留まることが多いなかで、世代の問題として時代との相関関係において位置づけることにも繋がる。

以上の関心に基づき遠藤周作『青い小さな葡萄』(一九五六年一二月、新潮社)の研究に取り掛かった。綾目広治「『第三の新人』論——核家族・母・そして受験——」(『昭和文学研究』第七二集、平成二八年三月)では「もっとも、遠藤周作も落第を繰り返した人であり、また政治的な事柄に対しては距離を置いているところなどにおいて、「第三の新人」的ではあった」と述べるように、「第三の新人」に数えられる遠藤は、「政治性」の観点から論及されることは少ない。しかし、作品の〈戦争〉表象には同時代における遠藤の政治闘争への関心とも結びつきが見られ、重要な論点を提示する。

『青い小さな葡萄』は、遠藤自身のフランス留学の経験を題材とした、〈戦争〉の痕跡を色濃く残す作品である。本作は戦後リヨンに留学した伊原を主人公とし、「きいらい肌」が戦犯者として眼指される時代状況に直面させる。本作ははじめに、日本人としてのナショナル・アイデンティティが、戦後のリヨンにおいて日本人の戦犯問題として伊原に表れる展開となり、その後リヨンにおける、戦争犯罪の問題が浮上してくる仕掛けとなっている。

特に注目したいのは、作中ラジオで報道されるスランスキー裁判である。栗栖継によれば、「スランスキー事件はスターリンが直接あるいは間接(ラコシヤソ連人顧問たちを通じて)ゴトヴァルト以下のチェコスロヴァキア共産党指導部に圧力をかけておこさせた驚くべきデッチアゲ事件で、その規模と過酷さにおいては優にわが国の大逆事件に匹敵する」(江川卓、栗栖継篇『社会主義の苦悩と新生』「訳者付記——スランスキー事件について——」昭和四五年三月、学芸書林)ものである。遠藤は昭和二八年の『文學界』の九月号に「アルプスの陽の下に」を發表しており、そこでスランスキー裁判のいかがわしさを指摘する。「デッチアゲ事件」によって抹殺されてしまう政治闘争の不当さを物語の後景に漂わせる本作は、陰謀により表舞台から追放されてしまった元記者のモンドンとともに、時の権力者によって社会的に抹殺される事態を二重写しにする。本作は、政治闘争によって蹂躪され、歴史からこぼれ落ちてしまった個という問題として〈戦争〉の痕跡を描くのである。その意味で作中を通して最後まで生死がわからずにいるスザンヌ・パストルは、もっとも端的に〈戦争〉の被害を被った人物として措定されているといえる。戦時下においてスザンヌから食料を貰ったと語るハンツは、戦後恩を返すためにフランスへ赴く。スザンヌ探しの旅の途中に出会うのが主人公伊原であり、本作は伊原とハンツの搜索の旅を追うという構成になっている。つまりスザンヌの行方を中心として展開していくのであるが、最後までスザンヌの生死は不明のまま本作は幕を閉じる。スザンヌの名が刻まれた墓(死亡した年月がハンツの記憶と食い違う)や、政治闘争に巻き込まれて私刑となったのではないかという可能性が仄めかされ、ひいてはハンツの記憶するスザンヌ・パストルという人物がいたことさえ揺れ動いてしまう本作の展開に、ハンナ・アーレントの「忘却の穴」(大久保和郎・大島かおり訳『全体主義の起源 3 [新版]』平成二九年八月、みすず書房)との接続を試み、政治闘争によって、生者が生存していたことすら忘却される事態に迫った作品としてあることを明らかとした。最後に、事件の「局外者」でしかない伊原が唯一、事件の真相に迫る者となる展開を考察し、当事者の沈黙という状況においては「局外者」の介入が求められる事態を描いていると述べた。

研究成果の概要 つづき

つぎに安岡章太郎『遁走』（「旅愁」『群像』一九五四年六月、「遁走」『群像』一九五六年五月、「黄塵」『文学界』一九五六年一二月。その後『遁走』一九五七年一二月、大日本雄弁会講談社に収められた）を分析した。本作は安木加介という、軍務から落ちこぼれてしまう人物を主人公とする作品である。加介は軍務に従事する傍ら異常な食欲を覚えてしまい、それによって下痢を引き起こす。加介は異常食欲を軍隊への「復讐」と読み替えていくのだが、そうした展開は、先行研究において「自己の保持」というテーマとして論じられてきた。それはまた、戦時を回想する安岡の「自分の周辺——つまり外側——に求められない別世界を、自分の内側につくり、そのなかにこもるということを精神形成の途中でやらざるを得なかった」という言及（『私の文学 ちいさな片隅の別世界』『われらの文学 12 安岡章太郎』昭和四四年一〇月、講談社）や『遁走』発表時の自己言及と近似するものである。「外部」／「内部」を軍隊／身体内部とする図式は、過酷な「外部」を仮想敵に、対立する「内部」を立ち上げることで、作家の特権性の称揚にも繋がる。

しかしながら、安藤陽平も指摘するように、軍隊に対する抵抗は頓挫として描かれる（「劣等兵から見出される「希望」——安岡章太郎『遁走』——」『昭和文学研究』第七二集、二〇一六年三月）。そもそも軍隊組織が加介の異常な食欲を引き出したという設定に注目するならば、『遁走』はむしろ、個の「内部」が軍隊組織によって馴致されていくプロセスを描いていると見てよい。本作において重要なのは、異常食欲が軍隊式洗礼によって引き起こされながらも、のちにそれを軍隊に対する「復讐」と読み違えていく加介のありようである。その意味で本作は「自己の保持」ではなく、生成と喪失の往還を描いているといえる。そして「自己を保持」し得ない加介の姿は、「自己形成」を経ることなく戦争に巻き込まれた「戦中派」世代の問題に接続する。本研究では抵抗という一貫した主張を持ち続けることのできないありさまと、軍隊における加介のままならない身体性としての〈足踏み〉という動作のもつ寓意性に着目し、軍隊への対峙の可能性を追求した。そして同時代のエッセーを補助線として、戦後一〇年における本作の批評性を明らかにした。

最後に小島信夫の〈戦争〉小説について考察を行った。座談会において小島は「いろんな理由があって、ぼくは将校にもならないし、いい地位にもつかなかったわけだけれども「星」というような小説にも書いたのだが、実際は上になりたいよ、ものすごく。一つでも上の階級になりたい。だから軍隊だって、ほかの世界と同じではないか、ということがすごく濃厚だった」（遠藤、安岡、吉行、庄野「座談会 文学と資質」『文芸』昭和四〇年七月）と述べており、「日常性」とともに軍隊における進級の問題について言及している。

小島において進級の問題は、日系二世を主人公とすることで展開された。五十嵐恵邦は日系二世の兵士を描いた小島の〈戦争〉小説を、「二つの国の中間に存在する人物を通して、小島は、敗戦直後の時期に抑圧されてしまった、両国の対立と緊張とを掘り起こすのである」（『敗戦の記憶』平成一九年一二月、中央公論新社）と評価する。小島において軍隊は、「日本人」への同一化が問題とされる場なのであり、主人公が日系二世として設定されていることは、進級の問題と「日本人」になることとが不可分のものとして提示される。日系二世を主人公とする「燕京大学部隊」（『同時代』二号、四号、昭和二七年四月、十一月）「星」（『文学界』昭和二九年四月）、「墓碑銘」（『世界』昭和三四年五月～三五年二月）は、それぞれ「日本軍人」への同一化を試み出世を目指しながらも軍隊組織内において異質なものとして浮き上がってきってしまうことを主題としている。この三作品に共通する、軍人や「日本人」への同一化という問題と、日常性との接点については今後の課題として考察していきたい。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

1 雑誌論文

泉溪春「忘却をたどる——遠藤周作『蒼い小さな葡萄』論」『立教大学日本文学』122号、2019年7月、64頁～76頁

2 図書

該当なし

3 シンポジウム・公開講演会等の開催

該当なし

4 その他

2019年度日本近代文学会秋季大会 (於・新潟大学、10月、口頭発表)「足踏みする軍靴——安岡章太郎『遁走』論」